

開催地名：沖縄県読谷村	
開催日時	令和2年11月5日（木） 19：00～21：00
開催場所	読谷村文化センター
語り部	島田 福男 （宮城県仙台市）
参加者	自主防災組織、自治会、赤十字奉仕団、民生委員児童委員等 約75名
開催経緯	<p>当村においては、現在、急傾斜地及び沿岸部地域の5つの自主防災組織のみの設立にとどまっており、内陸部地域の自主防災組織の結成が課題となっている。結成に向けて、内陸部の後方支援の役割について学び、自主防災会の必要性について認識していく必要がある。また、近年大きな災害が起こっていないため、住民の災害に対する危機意識が低く、既存組織の育成強化が求められている。これらの状況を踏まえ、語り部講演を実施して防災意識の向上を図りたい。</p>
内容	<p>（1）はじめに</p> <p>私は仙台市青葉区川平学区の連合町内副会長を務めていた。川平地区は仙台市の北西部にあり、山を切り開き大規模団地開発をしたエリアである。標高は100メートルほどで、東日本大震災で地滑りが起こり、47棟が倒壊した。東日本大震災の前後で行った活動についてお話しする。</p> <p>（2）連合町内会の防災活動</p> <p>川平学区連合町内会は5つの町内会で組織されている。地域の人口は約1万人で、規模の大きい連合町内会である。仙台市では昭和53年の宮城県沖地震をうけて自主防災組織の結成を促した。私の町内会でも組織を結成したが、高齢化により活動が形骸化していった。これではいけないと思い、連合町内会結成を機に連合での自主防災組織を作った。平成19年、川平学区連合町内会自主防災行動計画を策定、防災の取組を始めた。毎月1日を町内会防災の日と定め、150本ののぼり旗を掲げてもらう。ビブスを150着購入し、防災訓練などのとき役員に着てもらっている。</p> <p>また、他にも450万円をかけて発電機やリヤカー、炊き出し用大鍋など防災用資材・機材を購入した。公園の倉庫などを各所に置き、すぐ利用できるようにした。平成22年には、社会福祉協議会や防犯協会、小学校、中学校、老人クラブ、地域内の病院、商店など50団体とともに川平地区防災対策連絡協議会を設立した。定例会を行うと同時に、避難所運営などを具体的に考える防災訓練を行った。その後、災害対応計画案が固まったので地域住民に説明すると、200件以上の意見が出た。意見を集約していたとき、東日本大震災が起こった。</p> <p>（3）地震発生後の動き</p>

揺れがおさまってから、私は災害対応計画にのっとり、隣近所の安否確認を行った。また、川平地区の小学校に災害対策本部を設置した。町内会に照明用の発電機、投光器、燃料用のガソリンを設置してもらった。発災初期の段階で重要なポイントは2つあった。1つは照明用の器具を町内会に借り、避難所の体育館内を明るくしたことである。おかげでひどい余震に揺れる体育館の中で、パニックにならずに済んだ。もう1つは避難者カードを発行したことである。避難所の運営はカードをベースにして行うこととし、避難者の問合せの際にも活用した。また、外出するときは所定の場所に置き、帰ると戻す。食事のときもカードの情報をもとにして名前を呼ぶ。カードを発行したことで、整然とした避難所運営を行うことができた。

3月16日には、仙台市内では1、2を争うぐらい早く指定避難所を閉鎖することができた。震災前に1年間かけて、50団体で話合いや訓練を継続していたので意識が共有できており、協力体制を取ることができたのだと思う。

(4) 震災での気づき

東日本大震災後、自主防災活動には小・中学生にも参加してもらっている。平成29年は3学区同時防災訓練を行った。3学区に小・中学校が5校あるが、5校同時に指定避難所を開設して防災訓練を行った。またここ数年、小学校と共催で防災訓練を行っている。小学校と共催で行うと、若い父母、そして祖父母の世代も参加してくれるので、幅広い年齢層で防災訓練の実施が可能になる。防災に関しては地域でできること、行政でできること、それぞれ役割があると思うので、役割をしっかりと話し合って連携を大切に、自助できるところは自分たちで行うという心がけで活動していただきたいと思う。



開催地より

東日本大震災の体験談、教訓について、自主防災組織の活動を中心にお話しただいた。災害時における自主防災会の役割について、震災前からしっかりと認識されていたことが良く分かった。今後の自主防災活動について大いに参考になるお話だった。